

第1章 本研究の背景と目的

1-1 コミュニティ概念の変化

昨今、様々な制度が住民参加型を指向しつつあるが、それらにすぐに対応できる住民はまだまだ少ない。またそれらの母体となるはずの「コミュニティ」の概念も変化してきている。「まちづくり」という言葉が流行語のように多用されているが、私たちはまだノルマ的と感じ、構える部分が少なからずあり、なかなかそのような主体的な活動に一步踏み出すことができない。そのような結果、何か問題が生じたとき「形ばかりのコミュニティ」は何の役割も果たすことができない。

本来コミュニティ活動は、日常生活の延長線上にあるものである。マッキヴァーは、「地域性と共同体感情を基礎とした『人間生活が行われる一定の地域』」¹⁾をコミュニティの概念として唱えた。しかし、近年、地域における「コミュニティ活動」をおこなう基礎単位と、行政区界や計画区域は必ずしも一致しなくなりつつある。「地域=コミュニティ」というという捉え方に限界が生じてきたのだ。

こうした背景を受けて、それに代わる新しいコミュニティの概念として、「テーマコミュニティ」という言葉が聞かれるようになった²⁾。「テーマコミュニティ」とは、階層と時空を超え情報ネットワークに支えられた、趣味や知的的好奇で結びつく仲間である。これらは新しい人々の関係性の表現といえる。近所付き合いを含めた地縁コミュニティに無関心な人が多いが、趣味や知的的好奇心で結びつく仲間は増えてきており、それらを通して「公」を意識し、コミュニティ活動の新しい基盤となるものとして注目されつつある。

1-2 ガーデニングをとりあげる意義

「『日常生活の延長』として、人と人とを結び、コミュニティ活動の基盤作りを担うもの」として、ガーデニングがあげられる。ここ数年のガーデニングブームは女性の参加で活性化しており、園芸、庭いじりは余暇活動の中でも上位を占めている³⁾。

1-2-1 ガーデニングの概念

“ガーデニング”という言葉は最近ではもはや一般的に使われるようになったが、古来の伝統的様式の「造園・園芸」とは異なる、新しい概念を持っているという。これまでの日本の伝統的造園は、樹木の緑を主にした造形が主流であったが、“ガーデニング”は花苗の生育をコンテナやプランターなどを多用して楽しむという特色がある(図1-1)。



図 1-1 ガーデニングの一例

ガーデニングブームは一過性のようにとられることが多い。しかし社会・ライフスタイルの変化のなかで、環境悪化や住宅様式、インテリア・エクステリア（建物の外回りや周辺域の塀，門扉，垣などの屋外構造物や植栽の総称）感覚のいっそうの欧風化、動植物との共生やヒーリング欲求など、生活に身近なガーデニングを受容する必然性は強くなってきているといえる。

本研究では、「行為者によって、個人の庭、玄関、室内、ベランダ、屋上などで行われる非経済的な意味を持った自主的な花づくり・花かざり活動」を、ガーデニングと定義し、またガーデニングを行う行為者を総称してガーデナーと呼ぶこととする。

1 - 2 - 1 ガーデニングの効果と庭がもつ公的な役割

個人が育てる花や緑は、身近さゆえにとっても高い日常性をもつ。個人が計画性もなく作ってきた庭でも、それゆえその雑多さが独自のテリトリーをかたちづくり、そこがそれぞれに独自の顔を持つ「ひと」のすみかであることを庭を訪れる人に示している。いわば庭は、個人が所有する私的な空間でありながら、地域や近隣と関わって自らを表現できる場所、公的な意味を持ちうる場所であるといえる。

林ら⁴⁾は、ガーデニングの目的について「内面的目的・効果」、「外面的目的効果」、「実用的目的効果」の3つがあるとしている。ガーデニングにおいては、個人の内面的満足感を得ることが第一の目的となっているが、内面的な満足感を得られた後、街の景観向上や交流など外面的な目的や実用的な効果に視点が移動することが明らかにされている（図1-2）。

表 1-1 ガーデニングの目的・効果

目的・効果	具体的な内容
内面的目的・効果	心の安らぎのため、生き物を育てる楽しみのため、生活の潤いのため、ストレスの軽減、癒しのため、自然の大切さを知るため
外面的目的・効果	街を美しくしたいため、道行く人の心の癒しのため、知人・友人との交流のため、庭やベランダの美化のため
実用的目的・効果	草花や野菜の利用のため、手軽な趣味だから、適度な運動になるため、最近はやっているから

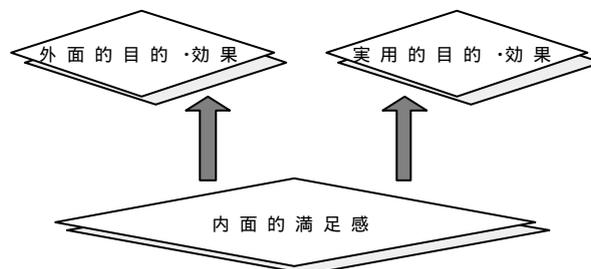


図 1-2 ガーデナーにおけるガーデニングの目的・効果の移行

上南木⁵⁾は、庭の所有者が庭と外部との境界部に対して何らかの公的な役割を抱いていることを明らかにしているほか、北原⁶⁾らは庭の所有者が「共空間」に対して「意図をSP化⁷⁾」として表し、「行為という形で住み手の態度がストレートに出ないまでも、表出

性向の違いとなってあらわれる」と述べている。都市域での住宅の庭は居住者に影響を与えるだけでなく、街並みの環境形成に果たす役割、またテーマコミュニティ形成の役割も期待されているといえよう。

1-2-2 ガーデナーの意識について

私的な役割を担う庭でそれらの公的な役割を求め、同時に個人の活動であるガーデニングが公へと展開するためには、その行動の主体であるガーデナーの意識特性の把握が必要となる。これまで、ガーデナーの意識特性についてはいくつかの研究が報告されてきた。川根ら⁸⁾は、花づくりが盛んといわれる北海道恵庭市恵み野の住民を対象として、庭づくりの動機を元に住民間の意識の相違、および庭づくりにおける取り組みとの関連を検討し、私的な空間である庭の成立に関わる要因と公的な役割を期待する場合の留意点についても考察をおこなっている。

また、林ら⁴⁾は、兵庫県のガーデニング愛好者を対象にガーデニングという余暇活動が緑豊かなまちづくりへとどのような広がりをもっているかについて検証を行い、その促進要因および活用の仕方について考察している。この中でガーデニング活動が広がりを持つための要因としてあげられていたものは、個人属性などの初期要因、居住する地域の自治活動の状況や地域緑化の背景など外的な刺激、講習会やコンクール参加の有無などであった。

1-3 ガーデニングコンクールについて

1-3-1 ガーデニングコンクールの概要

本研究では、ガーデニング活動が広がりを持つための要因の一つである「ガーデニングコンクール」とコンクール応募者の意識特性に注目した。ガーデニングコンクールは様々な形式により、各地で開催されている(表 1-2)。表 1-3 は全国でのガーデニングコンクールについて一例をまとめたものである。最近のコンクールの傾向としては、ただ花を植え、景観的に美しいということだけでなく、地域へ安らぎを与えるなども審査の基準の中に含まれるようになってきている。

表 1-2 ガーデニングコンクールの様々な形式

規模・主催者	規模	主な主催者	形式	形式	概要
	地区	自治会		自治会	競争形式
	市町村	市町村	推進賞形式	行政などが花づくりや緑化に特に貢献したと判断した人に賞を授与	
	県	県			
	国	財団法人 ガーデニング雑誌など			

評価の対象	対象	概要	部門	個人
	空間	空間を評価		団体(コミュニティ・学校)
	花かざり(ハンギングバスケットなど)	部分的な花かざり(技術)を評価		企業(職域)
	花づくり活動	個人(花づくり・花への取り組み)を評価		自治体(市町村)
	写真・デザイン	花かざりの写真や花壇のデザインを評価	店舗	

コンクール開催が与える影響としては、ガーデナー同士の競争意識が生まれ民有地の緑化が進むことや、目標が生まれガーデニング活動が活発になることなどが予想される。また、コンクール入賞が与える影響については民有地の緑化の推進や地域への波及効果があることが報告されている⁹⁾ほか、名誉を与え、キーパーソンの存在を知らせ花づくりを活性化させるなどの効果が予想される。

表 1-3 全国におけるガーデニングコンクールの例

名称	主催	概要	規模	形式	部門
花のまちづくりコンクール	財団法人 日本花の会	花を用いたまちづくりの素晴らしさを世に伝え、良好な生活環境の創出を促進することが目的	全国	競争型	市町村部門・団体部門・個人部門 企業部門
緑の都市賞	財団法人 都市緑化基金	緑あふれる施設作り、街並み作りに成果を上げている民間団体を募集 表彰	全国	競争型	施設緑化部門 地域緑化部門 緑の都市作り部門(市・町・村)
ひょうご花と緑のコンクール	兵庫県	花と緑に包まれた県土作りを進めるため四季折々に育てられている優良事例や環境に配慮した緑化事例を募集・表彰	全国	競争型	家庭緑化部門 学園緑化部門 職域緑化部門・コミュニティ緑化部門
花のみやざきづくりコンクール	宮崎県	花を慈しみ、花で彩られた生活の中で全ての人々が潤いと安らぎを共有できる「ほほえみ花の国みやざき」を目指して開催	県	競争型	個人部門 団体部門・学校部門 企業部門・フンポイントガーデニング部門
花のまちづくりコンクール	三重県	花を用いたまちらしさを広めることが目的。空間の有効的な活用、アメニティ、コーディネーション、独創性、花のまちづくり運動への取り組み、周辺への波及効果などが評価される。	県	競争型	市町村部門 個人部門・団体企業部門
緑化文化賞	岐阜県	花の都ぎふ運動に積極的に取り組み、地域の花かざりに特に熱意のあった団体、個人に対して、これ为契机により一層の活躍を期待し、表彰するもの	県	推進賞型	
八日市花と緑の推進賞	滋賀県八日市 市	店舗を花で飾ったり、自宅の庭でガーデニングに取り組んでいる人、公園を清掃している人など、花づくりや緑化推進に取り組んでいる市民や団体を表彰するもの	市町村	推進賞型	

1 - 3 - 2 調査対象の選定と「花の都ぎふ」花かざりコンクールの概要

本研究では、岐阜県と財団法人「花の都ぎふ」花と緑の推進センターが主催する『「花の都ぎふ」花かざりコンクール』(以下、花かざりコンクールと略記)を研究の対象とした。「花かざりコンクール」は、個人の応募、書類による一次審査、現地調査による二次審査を経て優劣が決める「競争」形式を取り、花が飾られた「空間」を評価するコンクールである(第8回から始まった一次審査では、第8回で一次審査を担当する各県域ごとに上位5点が、また第9回では各圏域応募者数全体の25%が二次審査へと進んでいる)。これらを対象としたのは、岐阜県が県ぐるみで花づくり・花かざりに取り組んでおり、全国でも早い時期からコンクールが行われているため、コンクールとしての特徴や課題点をはじめ、コンクールがガーデナー意識に及ぼす影響などについても把握することが可能であると考えたためである。

1 - 4 本研究の目的と構成

本研究の目的は、まずガーデニングコンクールの特徴の把握をおこない、コンクールに参加するガーデナーの公への意識特性およびコンクールが参加者の意識に与える影響を明らかにし、ガーデニングコンクールのあり方について提案することである。

ガーデナーの意識や取り組みの公への展開の過程において、その促進要因としてのガーデニングコンクールの位置付けを明らかにすることで、ガーデニングを軸としたテーマコミュニティ形成のため糸口を探ることができるのではないかと考える。

本研究の構成は図 1-3 のようになっている。まず第 1 章で本研究の背景と目的について述べ、第 2 章で研究の手法、第 3 章で本研究の対象とする「『花の都ぎふ』花かざりコンクール」の概要と現状、課題について述べる。さらに第 4 章では第 8 . 9 回「『花の都ぎふ』花かざりコンクール」一次審査通過者の応募用紙からガーデナーの意識を導き出し考察をおこなう。最後に、第 5 章で本研究の結論を述べる。

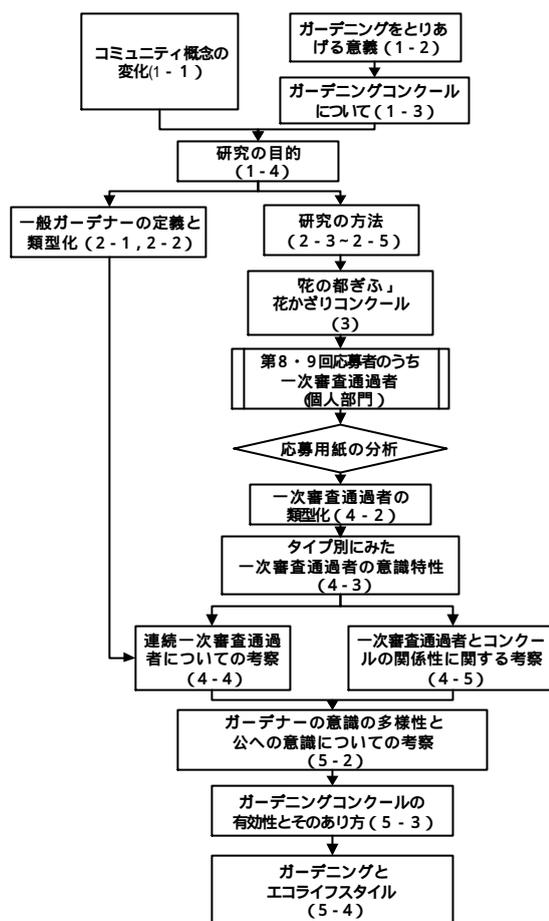


図 1-3 研究のフロー

〔引用文献〕

- 1) 山崎丈夫：地縁組織論 地域の時代の町内会・自治会・コミュニティ，自治体研究社（1999）
- 2) 有路信ほか：座談会「コミュニティー・ランドスケープと住まいの緑」，ランドスケープ研究，62(1)，7-21（1998）
- 3) (財)余暇開発センター編：レジャー白書'99：余暇開発センター，東京，145pp（1999）
- 4) 林まゆみ・塩谷元宏・？京緑：ガーデニング愛好者にみられる緑豊かなまちづくりへの活動とその促進要因，環境情報科学論文集，14，85-90（2000）
- 5) 上楠木昭春：居住環境形成に資する戸建て住宅地に庭空間の公的役割に関する研究，ランドスケープ研究，61(5)，793-796（1998）
- 6) 北原啓司・桂久男・近江隆：住戸まわりにおけるSP化と「境界」形態 - 帰省市街地における微景観の形成 # 2，都市計画学会論文集，24，415-420（1989）

- 7) 空間を公・市の概念で把握する手法の中で、両者の中間領域を示す概念として、住み手の態度の空間への表出を示すもの
- 8) 川根あづさ・愛甲哲也・浅川昭一郎:北海道恵庭市恵み野を事例とした住民の庭づくりに対する意識と取り組みについて,ランドスケープ研究, 63(5), 695-700 (2000)
- 9) 坂本磐雄・山口紘・田中正美・前田修:小都市の居住地緑化事業における緑化コンクールの効果と課題 - 沖縄県平良市と北九州市の比較を通して -, 都市計画学会論文集, 29, 355-360 (1994)